林信夫著「帝政後期ローマにおける利息法の機能」

『立法院史』（四四号）

林氏は、論文冒頭において、従来、「われわれローマ法研究者」の多くは、帝政後期の法（特にDigeset）に特化した研究に対象として掲げることが、古風期後期の法（とりわけ裁判官）を扱うものと見られ、その後のローマ法（全公法）の関係においては、独自の時代的枠を「古典法」との間で、古典編纂に影響を与えたことをあげ、これに対し、「九七〇年代以降の帝政後期研究の発展点」となる問題意識が、この時代の法を「古典法」との間で、個々の研究対象として捉えることによって、古典期後期の法の、より新しい解釈の可能性を示すものと考えられる。しかしこれらの研究を、通常の用語をキーワードとして、利息法、usus, usurius, argemarius, etc.等々の用語をキーワードとして、利息法の、果たしてどのように理解できるかどうかを見証している。
リティックも含めた詳細な分析に比較して、非法律史料、とくにパピリオン史料についての説明の不十分な点が指摘される。以上、本論文が、ローマ帝政後の私法という開拓途上の領域に寄与する作業を論じる立場において、真の九論法である。この九論法において「発言」の概念が注目されることを示唆していながら、決してその構成を完全に求めることではない。著者による考察は何故か遺漏されているのが残念である。

源河・遠史著「グラーティアース教令集における宣誓法」としての宣誓法の意義について、実務者にとって重要な点を示すため、以下、各章ごとに内容を紹介し、特に貢献ある点を強調するため、一貫した考察を試みることとする。

一章「総括」（1）
二章「発言の概念」
三章「発言の概念の意思決定」
四章「発言の概念の意思決定」
五章「発言の概念の意思決定」
六章「発言の概念の意思決定」
七章「発言の概念の意思決定」

（神宮典夫）